



晴れればよし

雨もまたよし

雨の記憶は残りやすいのでしようか。雨の日になると、悲しかった思い出と人の優しさを思い出します。

小学生の頃、急に雨が降り出し、仕方なく学校からぬれて帰るしかなかった時のこと、お母さんが傘を持ってお迎えにくる友の誇らしい笑顔があったこと、やみそうにない梅雨空を見上げながら、走って帰ったことなどを懐かしく思い出します。

新聞配達をしていました。新聞を雨にぬらさないように細心の注意を払いながらも、新聞をぬらしてしまい学校から帰ってから再配達をした事があります。

新聞が少々ぬれていても「おはよう。雨で大変だね。気を付けてね」と優しく声を掛けてくれる人もいました。

当時は、新聞配達と同時に月末には購読料の集金もしなくてはなりません。行き付けの床屋のおじさんは、新聞料金とは別にいつも10円くれるやさしい方でした。

早起きはつらいし雨の配達は嫌だったけど、おじさんの「ありがとう」「えらいね」の言葉に励まされ、小学3年生から6年生の夏まで続けることができました。新聞の休刊日や雨にぬらさないビニール袋のなかった時代のことです。

さて、上皇后美智子さまは、幼少の頃によくお聞きになられた童話として「でんでんむしのかなしみ」という本を紹介しています。

《一匹のでんでん虫がありました。ある日、そのでんでん虫は、大変なことに気が付きました。「わたしの背中の殻の中には悲しみがいっぱい詰まっているではないか。

この悲しみはどうしたらいいのでしょうか。・・わたしはもう生きてはいられません。わたしは何と言う不幸せなものでしょう」

そのでんでん虫は、次から次へと友だちのでんでん虫に相談して回ります。しかし、「あなたばかりではありません。私の背中にも悲しみはい

っぱいです」と、どの友達の答えも同じでした。

そして、「悲しみは誰でも持っているのだ。自分の悲しみは自分で耐えていくしかないのだ。

見た目では分からないけど、みんなそれぞれ悲しみや悩みを背負って生きている、という事に気付いたでんでん虫はもう嘆くのをやめたのであります。》というお話です。

新聞配達という小学校時代の経験が、その後の人生にどのように役立っているのか？「でんでんむしのかなしみ」という本との出会いは、その後の生き方にどのような影響があったのか？梅雨の時季、静かに振り返る時かもしれません。

日差しに見放された休日、「雨もまたよし」



長宿市指
豊留悦男